新生児敗血症・髄膜炎罹患児の乳児期の成長について

研究協力者　安次嶺　　馨

要　約：当院NICUで、1981～1989年に入院治療した新生児敗血症・髄膜炎148例中、在胎37週以上の正期産児は43例であった。このうち死亡例、多発奇形例、また里帰り分娩などのため１年以上経過観察できなかった例などを除く21例について１年間の成長をみた。敗血症13例（男7、女6）、髄膜炎8例（男7、女1）のうち、出生体重2,500g未満の児は3割、2,500g以上の児は18例であった。12ヵ月時の身長・体重は全例とも－1S.D.以上の正常域にあった。頭囲は全例－2S.D.以上の正常域にあった。家庭において養育上、特別な問題はなかった。

見出し語：新生児敗血症・髄膜炎

研究目的：新生児敗血症・髄膜炎は死亡率が高く、また重篤な全身症状を呈するため、生存者の成長発達に影響を及ぼす可能性がある。今回は多くのリスクファクターを有する早期産児を除き、成熟児に限って敗血症・髄膜炎罹患後１年間の成長が正常児同様にみられるかを調べた。

対象・方法：当院NICUで1981年～1989年の9年間に経験した新生児敗血症・髄膜炎148例のうち、在胎37週以上の正期産児は43例であった。これらの例につき入院カルテより、在胎週数、出生体重、発症日齢、性別、細菌学的検査、感染症に対する治療などをretro－spectiveに調べた。また退院後の経過観察で行った身体計測値を乳児成長曲線上にプロットし、成長を評価した。また定期検診以外に受診した理由についても調べた。

結　果：43例の内、死亡例、多発奇形例、里帰り分娩などのため１年以上経過観察できなかった例が22例であった。1年以上観察した21例の内訳は次のとおりである。敗血症は13例で発症が日齢４以内の早発型10例、５日以上の遅発型3例、髄膜炎は８例で早発型３例、遅発型５例であった。性別は男児14例（敗血症7、髄膜炎7）、女児７例（敗血症6、髄膜炎1）であった。出生体重は2,500g未満３例、2,500g以上18例であった。人工換気を行ったのは髄膜炎の１例で、交換輸血例はなかった。低血圧のためドパミンを使用したのは２例で、うち１例はPFCを併発した。髄膜炎の２例は抗けいれん剤を使用した。

成長についてみると、12ヵ月の時点で身長体重は全例－1S.D.以上の正常域にあった。また頭囲は全例－2S.D.以上の正常域にあった。発達に

沖縄県立中部病院小児科
Dept. of Pediatrics, Okinawa Chubu Hospital

関して明らかな遅延や脳性麻痺の例はなかった。

外来受診理由は呼吸器感染、消化器感染、尿路感染など、一般の乳児と同様の傾向を示した。

考　察：新生児の敗血症・髄膜炎は生命予後の悪い疾患である。当院NICUの148例中17例（11.5％）、成熟児43例中7例（16％）が死亡している。成熟児の起炎菌はGBSが13例と群をぬいて多い。我々の症例では生存例の成長は乳児期を通じて正常であり、家庭で養育する際にも特別な問題はなかった。栄養法に関してカルテから十分な情報は得られなかった。沖縄県の乳児栄養についての報告では母乳栄養率は1ヵ月で約40％、3ヵ月で約30％であるので、今日の症例の栄養法もこれに準じて考えてよい。

成熟新生児の敗血症・髄膜炎の生命予後を左右するのは診断と治療開始の時期であろう。生存すれば、乳児期の成長と発達はほぼ正常な経過をたどる可能性が大きい。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:当院NICUで、1981～1989年に入院治療した新生児敗血症・髄膜炎148例中、在胎37週以上の正期産児は43例であった。このうち死亡例、多発奇形例、また里帰り分娩などのため1年以上経過観察できなかった例などを除く21例について1年間の成長をみた。敗血症13例(男7、女6)、髄膜炎8例(男7、女1)のうち、出生体重2,500g未満の児は3割、2,500g以上の児は18例であった。12ヵ月時の身長・体重は全例とも一1S.D.以上の正常域にあった。頭囲は全例一 2S.D.以上の正常域にあった。家庭において養育上、特別な問題はなかった。